

小樽港

小樽市産業港湾部港湾室

〒047-0007小樽市港町4-2

☎0134-23-1107

URL : <http://www.city.otaru.lg.jp/>



1. 概況

小樽港は、北海道西部に位置し、石狩湾の西隅高島岬に抱擁され、東方は日本海に向かって開け、北・西・南の三方は山に囲まれている。常に港内の平穏が保全されているため、明治4年札幌に開拓使庁が置かれるや北海道開拓のための海陸連絡の要地と定められ、明治6年色内村に小樽港最初の築造ふ頭が建設された。

また、石狩炭田の開発と合わせて、明治13年に小樽、札幌間に道内最初の鉄道が敷設されたことにより、本港は石炭積出港として、また内陸部への物資供給の中継港として、本格的な港湾活動の第一歩を踏み出すこととなった。

その後、北海道開発の進展に伴う商圏の拡大と人口の増加等により港勢の伸びがめざましく、明治22年には特別輸出港に、同32年には外国貿易港に指定され、確固たる商港の地位を築くに至った。

本港の本格的な港湾建設工事は明治30年にはじまり、大正10年には延長約4kmに及ぶ防波堤が完成し、引き続き昭和7年堺町岸壁、同9年厩町岸壁等の係船岸壁が相次いで完成、さらに同15年第1号ふ頭、同25年第2号ふ頭が建設され、北海道屈指の主要港湾として栄えた。

第2次世界大戦中の経済統制、戦後の商圏喪失等により、一時港勢の後退を余儀なくされたが、昭和23年の貿易再開とともに再び活況を呈し、同26年には重要港湾に指定された。

しかし、昭和30年以降の我が国経済の高度成長の中、港湾を核とした工業立地とモータリゼーションの進展、太平洋側を中心とする国土構造の変化等の波が押し寄せ、日本海に面し、山に囲まれ平地の少ない本港は厳しい環境に置かれることとなった。

こうした状況のなか、本港においても流通革新に対応した要地造成や効率的な荷役機械の導入、臨港道路の整備等が緊急課題となり、昭和47年中央ふ頭、同56年勝納ふ頭が大型船舶の接岸可能な岸壁と流通関連用地や工業用地をもつ大型ふ頭として整備された。また、背後圏と結ぶ幹線道路についても、札幌バイパスと道道小樽港線が整備されるなど、本港の近代化が意欲的に進められた。

この間、昭和45年には日本海側初の長距離フェリー航路が舞鶴港・敦賀港との間に開設され、昭和49年には新潟港との航路も開設された。現在、敦賀航路は特定日運航中であるが、週13便が運航されており、これらの定期フェリー航路は、

北海道と北陸・関西地方を直接結ぶ大動脈となっている。

また、輸入穀物の輸送を担う船型の大型化に対応するため平成5年勝納ふ頭-13m岸壁を供用開始し、さらに、貿易拡大や物流の多様化に対応するため、老朽化したふ頭を再開発し、平成12年には多目的外貿ふ頭として港町ふ頭を供用開始した。この港町ふ頭では平成14年より中国定期コンテナ航路が運航しているほか、平成25年にはロシアとの間にRORO船定期航路が運航している。

このほか、北海道の空の玄関である新千歳空港と交通アクセスが良いことや、臨港地区や周辺に多くの観光・商業施設があるほか、港に直結する高速道路などの交通ネットワークを利用した広域的な観光ツアーを提供できることから、近年はクルーズ船の寄港地として人気が高く、寄港回数が増加している。

さらに、小樽港マリーナや小樽築港駅周辺再開発などのウォーターフロント開発、歴史的港湾施設である小樽運河及び周辺の環境整備を進めるなど、時代の要請に対応し、生活にかかわる機能も導入した総合的な港湾空間の創造を目指して鋭意港湾整備をつづけており、本港は、今後とも地域の活性化に重要な役割を果たすことが期待されているところである。